

学びでつながる地域振興プロジェクト

遠藤 健治、阿部 忠義

大正大学 地域構想研究所 南三陸支局（宮城県南三陸町）

1. 地域紹介

宮城県南三陸町は、世界三大漁場とも称される三陸海岸に東向きに面し、残る三方を山に囲まれている。連なる山々の尾根がほぼ町境と一致し、分水嶺となっているため、水源から海に至るまでが小さな1つの町の中で完結しているという特徴的な自然環境を持っている。町に降った雨は町内の森や里、街や川を経て海へと流れ込むため、漁業が盛んに営まれる志津川湾の環境を左右するのは、山々や森と里の環境、そして私たち町民のくらしのスタイルそのものである。

2011年3月11日、南三陸町は東日本大震災により甚大な被害を受けたものの、その悲しみと苦難の中で私たち町民は、町が元来より抱えていた根源的な課題を見直し、新たな町へと生まれ変わるきっかけとなった。

こうした中、大正大学では震災直後いち早く、TSR（＝大正大学の社会的責任）の理念に基づき、南三陸町における現地ボランティアをはじめとした支援活動を展開。継続的な復興支援を行った。このことがご縁となり、宿泊研修施設「南三陸まなびの里いりやど」が建設され、2013年3月にオープンした。

以来、東北再生私大ネット36をはじめ、全国の大学や企業などの様々な研修ツアーの拠点として利用されるようになった。特に5年目となった地域創生学部の地域実習は、南三陸ならではのカリキュラムにより充実したものとなり、大きな成果が得られた。こうした取り組みが、南三陸地域との交流・活性化につながり、町にとってもなくてはならない研修施設に成長し、事業も軌道に乗ってきた。ところが、新型コロナウイルス感染症拡大の懸念から予約キャンセルが多発し、状況が一変した。2020年度は、緊急事態宣言が発令された時期の4月～5月は前年同月対比5%以下にまで落ち込みするなど、想定外の惨事となった。

2. 今後の活動方針

東日本大震災から10年が経過した。南三陸町では、2020年10月には震災復興祈念公園が全面開園し、犠牲者の追悼と震災の伝承の場となった。復興商店街のさんさん商店街と祈念公園を結ぶ「中橋」も同時に開通し、中心市街地が整い、復興完遂に向けて着実に前進している。これからは、地域のコミュニティの再構築や生業の再生などのソフト面に注力し、その発展に向けた基盤を確立させていくことが課題となっている。こうした概況の中、今後の活動方針を次のように行うこととした。

《活動方針》

南三陸町では長い歴史のなか、これまでも幾たびもの自然災害を乗り越えて、人々の営みが維持されてきた。そのなかでも大きな東日本大震災を経験し、私たちは「人と人のつながり」「自然と人のつながり」「世代から世代へのつながり」の大切さを気付かされた。

その経験を生かし、次代を担う若者へ伝え、自分にとって大切な価値観を得るきっかけとなり、「未来を創る人」を育てていくために、大正大学地域構想研究所南三陸支局として、一般社団法人南三陸研修センターはもちろん、地域とともに日本一の研修フィールドを目指して、各事業に取り組んでいく。また、大正大学のエリアキャンパスとして位置づけられている宿泊研修施設「南三陸まなびの里いりやど」の適正な管理運営と機能充実に努めていくとともに、更なる事業成果を積み重ね、地域関係者と連携を図りながら持続可能な事業の確立に努めていく。事業方針や定款で規定された「目的および事業」に基づき、2021年度事業の重点項目を下記のように捉えている。

- 1) 新型コロナウイルスの感染予防対策を図りながら、適正な宿泊研修施設の管理をおこなう。併せて、スタッフの意識・スキルの向上に努め、より効率的な事業運営ができるように業務改善を行い、経営安定化を図る
- 2) 東北再生「私大ネット36」スタディツアーや地域創生学部等の地域実習受入において、より教育効果が得られプログラムの充実と、地域に還元できるような仕掛けを行っていく
コロナ禍においては、オンラインによる研修を充実させ、教育プログラムの高度化を図る
- 3) バイオマス施設見学などの循環型社会への取り組みを学ぶプログラムを実施するとともに、各種団体を対象としたフルオーダーメイドの研修プランや、スポーツ・アート・サークルを対象とした合宿応援プランなどを売り込み、積極的な集客活動をおこなう
- 4) 研修事業を展開する中でつながる関係人口を構築し、移住促進・企業立地促進につなげていく取り組みをおこなう
- 5) 情報発信等事業やコロナ対策関連事業などの受託事業や各種補助金事業へ積極的に取り組む

以上のように、地域を学ぶフィールドとして研修事業や地域振興事業、関係人口促進事業、地域創生学部地域実習などを、地域内外の関係者の協力を得ながら、積極的に展開していくとともに、「まなびの里」のストーリーが、若者にとってインパクトのあるものになるよう意識しながら、各種事業に取り組んでいく。こうした取り組みが大きな成果となり、学生・社会人・地域人など関わる全ての人に良い意味での刺激となり、人づくり・地域づくりの観点からも有益となるような地域振興事業へ進化させていきたいと考えている。

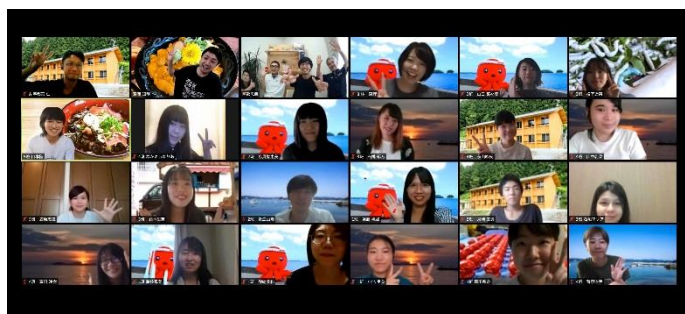
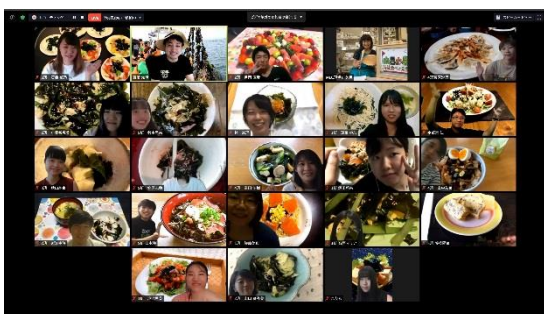
3. 地域との連携・関係づくりの活動実績など

南三陸町は、「森・里・海・ひと」をキーワードに、各々がそれらの関わり合いを重要視した取り組みを実践し、町の“復興”を超えた新たな町づくりへと取り組んでいる。

養殖施設の流出は過密養殖を解消し、結果的に海洋環境や漁業者の環境配慮が一新され、国内初となる国際的な養殖認証“ASC”の取得へと至った。一方、森林においては、古く伊達藩の時代から重宝されていたブランド杉材「南三陸杉」を通じた地域振興に取り組み、同じく国際的な森林認証“FSC”の取得を果たし、これらの双方を併せて一自治体で取得した、世界的に見ても稀有な町となっている。また、2018年10月には志津川湾が、特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約「ラムサール条約」に海藻藻場としては国内で初めて指定登録された。

こうした南三陸ならではの事由を新たな研修プログラムに取り入れ、地域との連携や関係づくりに努めながら、地域振興の一助を担っている。

また、関係人口構築、移住促進・企業立地促進のための事業活動や自治体関連受託事業へ積極的に取り組んでおり、その地域貢献度は少なくなく、今日では、南三陸研修センターの事業活動そのものが社会貢献につながっているものと自負している。



オンライン研修の様子